Ａ．聖書解釈と政治思想

オリエンテーション

導入：脳神経科学とキリスト教

１．聖書の政治思想とキリスト教社会主義

１－１：古代イスラエルと政治―契約・法・王権
１－２：イエスの宗教運動
１－３：パウロとローマ帝国
１－４：近代社会とキリスト教社会主義
１－５：宗教社会主義と解放の神学

２．現代政治思想とキリスト教

２－１：民主主義とキリスト教	6/10
２－２：政治的なもの――アーレント、ムフ	7/1
２－３：シュミットからアガンベンへ	7/8
２－４：ジジェクとパウロ	7/15

Exkurs

現代キリスト教思想とユダヤ的なもの	6/17, 24
キリスト教と科学技術	7/22

＜前回＞近代社会とキリスト教社会主義

（１）キリスト教的社会の原像

１．並木浩一「ヨブ記における契約――創造と救済」(『並木浩一著作集１　ヨブ記の全体像』日本キリスト教団出版局、2013年、260-271頁)。

２．ジョン・ドミニク・クロッサン『イエスとは誰か――史的イエスに関する疑問に答える』

（２）近代社会主義の成立とその背景

８．古代的な私的と公的の境界線は、近代化のプロセスにおいて崩れ去り、近代的な社会は、経済的活動が公的領域の中心的な関心事となるところに成立する。

→　「社会的なもの」の到来。大衆社会(mass society)は、近代化＝社会化の帰結。

平等性の実現という側面をもちつつも、政治的な主体の個性あるいは複数性の喪失。「近代世界における平等の勝利は、社会が公的領域を征服し、区別と相違が個人の私的事柄になったという事実についての政治的また法的な承認にほかならない。」(ibid., 41)

近代経済学の成立の歴史的前提：人間を画一的な行動パターンに還元することによって、人間の経済行動を統計学的に処理し予測することが可能になる。このような大衆社会は全体主義の前提であり、この中で、個人は反社会的で異常であるとの評価を免れるためには、支配的な行動パターンに同化するようにとの圧力を受けることになる。

→　近代の「人間の社会化」(socialization of man)というマルクスの分析の正しさ（ibid., 44)。

６．社会主義：近代以降に登場した広範な諸思想・諸運動を含む理論群に対して用いられる包括概念。

"Sozialismus,"（in: Joachim Ritter und Karlfried Gründer (hrsg.), *Historisches Wörterbuch der Philosophie, Bd.9*, Schwabe & Co, 1998, S.1166-1210.）

７．近代（啓蒙主義と産業革命以降）の社会変動に対する応答としての社会主義。

近代自由主義・資本主義の進展の諸矛盾（貧困、劣悪な労働環境）を、近代の徹底化によって克服することをめざす。人間的生の全体における自由と平等（政治的平等から経済的平等へ）を内容とする道徳的正義と幸福の理念の実現をめざす。

平等主義、相互主義、国際主義

（３）キリスト教社会主義――イギリス、アメリカ、日本

12. イギリスにおけるキリスト教社会主義

・近代社会における労働法制定の動向の中から。

・イギリスのキリスト教社会主義運動：1848 年、J.ラドロー、F.D.モーリス、C.キングスレーらに指導された社会改良運動。信仰に基づき、隣人愛と神の前の平等というキリスト教的理念の社会的実現を目指す。

職能別組合や消費組合などの各種の相互扶助の組合運動、そして労働者教育（隣保館・セツルメント事業、労働者大学）

13. アメリカの「社会的キリスト教」：1880 年代、アメリカの神学校を中心に生じた運動。

・神の内在性の強調：進化の中に神の内在を認める、宗教は世俗世界に直接関わり、宗教の目標は地上における良き生活（神の国）の実現に置かれる。

・罪人としての人間観の否定：人間の不完全さや欠陥は、理性によって改善可能である、その原因は社会的矛盾にある。

・罪の責任は個人にではなく社会にある：隣人に対する自由な奉仕の象徴としてのキリストの十字架、キリストの愛を強調。

15. 明治期の日本キリスト教と政治・社会思想

自由民権運動（おおよそ 1870-80）とキリスト教／キリスト教の戦争論：日清戦争、日露戦争／足尾鉱毒事件とキリスト教／労働運動・社会運動とキリスト教

・キリスト教社会主義運動：「日本の社会主義はキリスト教を一母胎として生まれ、活動してきた。しかしキリスト教界の大勢は社会主義に消極的であり、日露戦争では見解が全く対立した。社会主義者はキリスト教が次第に自分たちと敵対する支配層の側に立ち、それに奉仕する宗教であると断定するようになった。これに応じてキリスト教社会主義といわれる人たちの中に自己分裂が生まれてきたのである。」（218）

片山潜、石川三四郎、安部磯雄、木下尚江

１．聖書の政治思想とキリスト教社会主義

１―５：宗教社会主義と解放の神学

（1）バルトと宗教社会主義

１．スイスやドイツにおいてなされたキリスト教と社会主義との積極的な関係づけの試みとしての宗教社会主義。クッター、ラガツ

２．カール・バルト：

自由主義神学、ザーフェンヴィルの労働問題、宗教社会主義運動

→　第一次世界大戦における戦争政策に対する神学者を含むドイツ知識人の公然たる支持、ドイツのキリスト教社会主義の愛国主義運動への転換。

宗教社会主義から弁証法神学への転換：新しい世代の神学者において共有。

３．「ストライキとゼネストと街頭闘争、もし必要ならば、それらはなされねばならない。しかし、それに対する宗教的正当化や栄光化はなされるべきではない！　……社会民主主義的に、しかし、宗教的・社会的にではなく（*nicht* religiös-sozial）！」（Barth, 1919, 520f.）

４．バルトによる批判の論点：宗教社会主義がその正しさを主張する際に、「キリスト教的」「宗教的」であると述べること。「宗教的」と主張することによって、政治という「この世」の事柄を宗教的神学的に正当化しようとするあり方。

「神の判決と審判」、「神の革命」を、あたかも自らの力で（「別の革命」として」）遂行しようとするところに、「革命家の悲劇」（Barth, 1922, 464）と不義が存在する。

宗教社会主義における「宗教的」と「社会的」を「宗教的―社会的」という仕方で結

合する「ハイフン」が人間の不遜（巨人主義）であるとの批判

５.「この宗教社会主義批判を、単純に、キリスト教と社会主義の宗教社会主義的な一元化に対して、両者の二元化を原理とする立場からの批判であったとみるのは、十分に正しい考察に基づく判断であるとは言い難い。さらにまた、この宗教社会主義批判の背後にあるより根源的な二元論(Dualismus)、すなわち、神と人間との間に横たわる無限の質的差異に基づく二元論に由来するものとみるのも、適切であるとは言い難い。この『ローマ書』における二元論は、既述のところから既に十分に明瞭な通り、『根源』における一元論(Monismus in Ursprung)に基づいている。」（大崎、1987、404）

６．教会と国家との関係を、神の国とこの世界との関係――神の国の超越性と内在性（断絶性と連続性）――というより大きな連関の中で論じることが必要なる（「神の国／教会／世俗社会」の三者関係）。

７．キリスト教社会主義の限界がその楽観的な人間理解にある、宗教社会主義の問題も、同じ人間の問いへと収斂する。

（２）ティリッヒと宗教社会主義

１．バルトの宗教社会主義批判

↓　　「宗教的」と「社会的」をつなぐ「ハイフン」に対して。

バルトの宗教的社会主義批判と宗教批判との関連

「宗教は不信仰である」、「神の啓示は宗教を止揚する」という「宗教と啓示」との峻別。啓示あるいは神学を、人間的可能性としての宗教から区別する。

２．宗教が人間の可能性の事柄であるとするならば、この問題は、さらに、人間存在の問い（人間学）に至らざるを得ない。

３．ティリッヒの宗教社会主義論

『社会主義的決断』（1933 年）の宗教社会主義論

1919: Der Sozialismus als Kirchenfrage

Christentum und Sozialismus

1923: Grundlinien des Religiösen Sozialismus. Ein systematischer Entwurf.

1932: Protestantosmus und Politische Romantik, in: Paul Tillich. Gesammelte Werke. Band II.

1933: *Die sozialistische Entscheidung,* in: *Paul Tillich. MainWorks.3*.

Einleitung: Die beiden Wurzeln des politisches Bewußtsein

1. Menschliches Sein und politischen Bewußtsein

Die Wurzeln des politischen Denkens müssen im menschlichen Sein selbst aufgesucht werden.

ein Bild des Menschen, eine Lehre vom Menschen

Der Mensch ist im Unterschied von der Natur ein in sich gedoppeltes Wesen.

die menschliche Frage nach dem "Woher", Geworfensein, der Ursprung

Das ursprungsmythische Bewußtsein ist die Wurzeln alles konservatischen und romantischen Denkens in der Politik.

die Frage nach dem "Wozu", die Forderung

Die Brechung des Ursprungsmythos durch die unbedingte Forderung ist der Wurzel des liberalen, demokratischen und sozialistischen Denkens in der Politik.

Die Forderung, die von dem zweideutigen Ursprung losreißt, ist die Forderung der Gerechtigkeit..... Gerechtigkeit ist die wahre Macht des Seins. ... Der Ursprungsmythos darf nur gebrochen, enthüllt in seiner Zweidrutigkeit, in das

politische Denken eingehen.

４．基礎的人間学：社会的構想力　→ 政治思想の二つの系譜

「世界―内―存在」（「自己―世界」、「運命―自由」）「被投性―企投」

「起源―要請」、起源神話とその突破（預言者、ヒューマニズム）→　起源の両義性

実体原理（形成原理）と修正原理（批判原理）

↓

政治的ロマン主義（保守的あるいは革命的）とその意義

自由主義・社会主義とその限界

↓

宗教的社会主義の課題：社会主義と起源の力の再統合、合理性と非合理性

５．起源神話のイデオロギーに対する批判：預言者的また合理的

預言者は、共同体を担う起源の力の聖性を「当為の審判」のもとに置き、「超越的起源への関わりを人倫的要請の成就に依存させ」（ibid., 210）、これによって、起源神話を相対化する。しかし、「神話的なものが初めて取り除かれたのは、人文主義において、自律の土台の上においてであった」（ibid.）。自由主義、民主主義（議会制）、社会主義――これらは、実体原理としての起源の力に対する批判原理、修正原理に相当する――は、こうした起源の力を破る要請の意識（→超合理的また合理的批判）に基づく政治思想であって、それらは近代の人文主義の成立を前提とした合理的精神性の産物だった。

６．起源の二重性・両義性：イデオロギーの諸次元

「これは、起源が両義的であること意味している。起源の中には、真の起源と現実的な起源との緊張がある」、「現実的な起源は真の起源の表現ではあるが、真の起源を覆い隠し歪曲するものでもあるのだ。」（ibid., 292）

７．「真の起源」：超合理的形成（恩恵）から超合理的批判（預言）が生成する動性

↓

キリスト教的伝統における起源の力と社会主義との関係構築という宗教社会主義の課題は、超合理的形成、超合理的批判、合理的形成、合理的批判の四つのものを動的に関係づけことによって遂行可能。

＜参考文献＞

１．Barth, Karl

(1) *Der Römerbrief* (Erste Fassung,1919), in :*Karl Barth. Gesamtausgabe,II. Akademische Werke*, Theologischer Verlag, 1985.

(2) *Der Römerbrief*(1922), Theologischer Verlag, 1984.

２．大崎節郎『カール・バルトのローマ書研究』新教出版社、一九八七年。

『恩寵と類比――バルト神学の諸問題』新教出版社、一九九二年。

３．ドイツの宗教社会主義とそれを含めた当時の政治動向については、次の文献を参照。

Renate Breipohl, *Religiöser Sozialismus und bürgerliches Geschichtsbewußtsein zur Zeit der Weimarer Repblick*, Theologischer Verlag, 1971.

Kurt Nowak, *Evangelische Kirche und Weimarer Republik. Zum politischen Weg des deutschen Protestantismus zwischen 1918 und 1932*, Vandenhoeck & Ruprecht, 1988.

４．Tillich, Paul

Die sozialistische Entscheidung. 1933, in: *Paul Tillich. MainWorks.3*., deGruyter, 1998.

５．バルトやヒルシュとの論争を含むティリッヒの宗教社会主義の諸問題。

芦名定道『ティリッヒの宗教思想研究』(一九九四年、京都大学文学研究科に提出の博士学位)、第二部「キリスト・象徴・歴史」における「宗教社会主義関連部分」

（第５章「カイロス論と歴史解釈」）http://tillich.web.fc2.com/sub6.htm
芦名定道「ティリッヒと宗教社会主義」、『ティリッヒ研究』（現代キリスト教思想研究会）第 11 号、2007 年、1-19 頁。

（３）解放の神学とその多様性

８．Christopher Rowland（ed.）, *The Cambridge Companion to Liberation Theology*, Cambridge University Press, 2007（1999）.

Introduction: the theology of liberation（Christopher Rowland）

Part I: Contemporary Liberation Theology
1 The task and content of liberation theology（G. Gutierrez translated by Judith Condor）
2 'Action is the life of all': the praxis-based epistemology of liberation theology（Zoe Bennett）
3 Liberation theology in Asia（Bastiaan Wielenga）
4 Black theology（Edward Antonio）
5 Feminist theology: a critical theology of liberation（Mary Grey）
6 Demythologising liberation theology: reflections on power, poverty and sexuality（Marcella Maria Althaus-Reid）

Part II: Aspects of Liberation Theology
7 The origins and character of the base ecclesial community: a Brazilian perspective（Andrew Dawson）
8 The Bible and the poor: a new way of doing theology（Gerald West）
9 Liberation and reconstruction: the unfinished agenda（Charles Villa-Vicencio）

Part III: Analysis and Criticism
10 Liberation theology and the Roman Catholic Church（Peter Hebblethwaite）
11 Marxism, liberation theology and the way of negation（Denys Turner）
12 The economics of liberation theology（Valpy Fitzgerald）
13 Political theology, tradition and modernity（Oliver O'Donovan）
14 Globalising liberation theology: the American context, and coda（Ivan Petrella）

Epilogue: the future of liberation theology（Christopher Rowland）

９．Aloysius Pieris, S.J., *An Asian Theology of Liberation*, T & T Clark, 1988.

The Second Vatican Council opened the door for a comprehensive definition of what has traditionally been compartmentalized as liturgy, spirituality, and secular（that is, socio-political）commitment.（3）

in Jesus, God and the poor have formed an alliance against their common enemy: mammon.（15）

Poverty is not merely a material rejection of wealth, because mammon is more than just money.（16）

Poverty after all is a spirituality of struggle.（17）

Leonardo Boff assigns at least five meanings to it. I submit that in the final analysis there are only two basic concepts to be distinguished: *voluntary poverty*, which I have been discussing so far, and *forced poverty*, which engages my attention here. The first is the seed of liberation; the second is the fruit of sin.（20）

we have a God who assumes the struggle of the poor as God's own so that it becomes the divine struggle for the poor, the struggle God launched against the proud, the powerful, and the rich（Luke 1:51-53）.（23）

The local church in Asia is a *political church*: a neutral church is a contradiction in terms, for it would not be local.（36）

In the contemporary church, this ecclesiological revolution seems to have begun with the mushrooming of "basic communities" or grassroot communities or *ecclesiolae*.（40）

To *evangelize Asia is to evoke in the poor this liberative dimension of Asian religiousness, Christian and non-Christian*.（41）

There are actually two clear versions of religious socialism in Asia:（1）the more primitive form practiced by the *clannic* and quasiclannic societies spread throughout the vast stretches of nonurbanized Asia, and（2）the more sophisticated form represented by the monastic communities of Buddhist（Hindu, Taoist）origin.

The clannic society, *cosmic religiousness*, the order of nature and the order of society overlap,

Shintoism and Confucianism

The communism of Asian monks is founded on a metacosmic religiousness that points to a salvific beyond attainable within the person through gnosis

the two species of socialism belong to different social systems（clannic and feudal）and to different religious systems（cosmic and metacosmic）（43）

in *rural socialism*, the earth is everybody's property and nobody's monopoly. In *monastic socialism*, cosmic needs are made to serve rather than obsess the person.

To sum up then, the first and the last word about the local church's mission to the poor of Asia is total identification with monks and peasants who have conserved for us, in their religious socialism, the seeds of liberation that religion and poverty have combined to produce.（45）

For us Asians, liberation theology is thoroughly Western, and yet so radically renewed by the challenges of the Third World that it has a relevance for Asia that classic theology does not have.

it is not perhaps a new theology, but a new theological method, indeed the correct method of doing theology.（82）

It is an ecclesiological heresy, therefore, to suppose that a church becomes asianized when the white faces in the Asian episcopate are gradually replaced by black, brown, and yellow ones! An indigenous clergy is not necessarily as sign of an indigenous church! What makes an Asian Christian community truly indigenous or "local" is its active and risky involvement with Asia's cultural history, which is *now* being shaped by its largely non-Christian majority. Thus, a valid theology of liberation in Asia is born first as a *formula of life*, ... ,before .... as *confessional formula*.（111-112）

This process is now taking place germinally in the "basic *human* communities" emerging on the periphery of the official churches. Therein, the authentically *loca*l churches of Asia and the *valid* Asian theologies of liberation have already been conceived as twins in the same womb of praxis.（112）

（4）基礎的共同体と教育・言葉・意識化

10．解放の神学：理論と実践、抑圧・搾取の克服（抑圧者と非抑圧者の双方を変える→リューサーの「新しい人間性」）

↓

共同体形成・共同体の中での個

焦点としての「教育」

11．解放の教育：パウロ・フレイレ（Paulo Freire, *Pedagogy of the Oppressed*, Penguin Books, 1972（1970））

・The 'Banking' concept of education（as an instrument of oppression）
　/ the problem-posing concept（as an instrument for liberation）
　humanization / dehumanization
・liberation as a mutual process
・Conscientization
　As we attempts to analyse dialogue as a human phenomenon, we discover something which is the essence od dialogue itself: *the word*. ・・・There is no true word that is not at the same time a praxis. Thus, to speak a true word is to transform *the world*.（60）

12．脱学校化：イヴァン・イリッチ（Ivan Illich, *Deschoolong Society*, Pelican Books, 1971（1970）.）

13．教育センター・インディゴ書院のプロジェクト（グローバル・ヒューマンにティーズ・プロジェクト）。釜山。

インディゴ書院は、2004 年に設立された、出版社、雑誌、書店の複合体であり、既存の教育体制への対抗する新しい人文主義・人文教育をめざしている。実は、こうした動きは、世界の各地で、そして日本でも開始されつつあり、今、保守化に対抗した人文主義の変革が求められている。さまざまな立場があり得るが、一つのキーワードは政治である。インディゴ書院については、次のウェッブ記事を参照。

「韓国の若者、学びの場を求めて」
　（http://m.korea.net/japanese/NewsFocus/People/view?pageIndex=1&articleId=108268）
「Indigo Seowon: More than Just a Bookstore」
　（http://busanhaps.com/article/indigo-seowon-more-just-bookstore）。

（５）解放の神学の挑戦は続く

Thia Cooper（ed.）, *The Reemergence of Liberation Theologies. Models for the Twenty-First Century*, Palgrave, 2013.

13．Introduction（Thia Cooper）

When I decided I wanted to study liberation theology in 1997, the overwhelming response from people I knew in the United Sates was, "Why would you want to reserch that? Liberation theology is dead." Apparently, it was dying in the 1980s, and with the fall of the Berlin Wall, it became a piece of history.（1）

Liberation theology emerged in the 1960s in Catholic communities in Brazil and across Latin America as Christians worked to counter economic and political poverty.（1）

In the early 1980s, as theologies of liberation continued to take root and expand, struggling against oppression in Latin America and beyond, Cardinal Joseph Ratzinger, who later became Pope, began to speak out against the theologies. Pope John Paul II silenced Catholic liberation theologians, such as Brazilian priest Leonardo Boff, for their writing.

At the end of the 1980s, with the fall of the Berlin Wall, it appeared to the global North（United States and Europe）that democratic capitalism had won and would expand across the globe through globalization, Socialism and communism were deemed to have failed. Many people in the global North assumed liberation theology was no longer necessary.（2）

Oppression did not disappear with the fall of the Berlin Wall. Liberationists still work against oppression. Many types of liberation theologies have been labeled contextual theologies and granted academic niches.

Liberation theology has slowly returned to the academy in the United States and Europe as

recognition spreads that it is still alive. In 2006, Marcella Althaus-Reid, a feminist and sexual theologian; Ivan Petrella, working in liberation theology and public policy; and I put a panel together for the AAR's Annual Conference focused on liberation theologies for the twenty-first century.

This book is the first fuit of our collaboration.（3）

・Empire and Economic: Hopkins, Rieger, Sung, Walker, and Ruether

・Land: Hopkins, Ruether, Tinker, Raheb, Longchar, and Marcos

・Race and Ethnicity: Townes, Medina, Longchar, Marcos, Te Paa, Kirk, and Sinclair

・United States based: Hopkins, Rieger, Ruether, Valentin, Tinker, Townes, Kirk, Sinclair, Walker, and Sales

・Non-United States: Sung, Aguilar, Medina, Walz, Raheb, LOngchar, Marcos, Te Paa, and Petrella

・Two-Thirds World: Palestine: Ruether and Raheb

・Latin America: Sung, Aguilar, Petrella, Walz, Morcos, and Walker

・Specific Contexts: Ruether, Tinker, Townes, Medina, Raheb, Longchar, Morcos, and Te Paa

・Indigenous: Tinker, Longchar, Marcos, and Te Paa（7-8）

14. Rosemary Radford Ruether, "A US Theology of Letting Go"

In this eaasy I want to elicidate some of the basic principles of a US theology of "letting go." ・・・It is a theology of solidarity between people engaged in particular liberation struggles and their supporters within dominant societies.・・・there must be some repentance on the side of the sinners. Ultimately a transformation of both sides must take place so there is no more poor and rich, oppressed and oppenssors, marginalized and priviledged but a new society where all members enjoy dignity and access to the basic means of life.

Letting go was at least partially what the South African apartheid regime did or had to do in giving up its dream of two separate societies, white and Black, and allowing equal political citizenship for all in South Africa.・・・Letting go is what the United States has mostly refused to do in relation to the revolutions in the Third World, such as the one in Cuba and in Sandinista Nicaragua,（43）

I speak here of a mediating group that struggles against its own goverment within the imperial nation. There is also a mediating group in more oppressed socites who have come from priviledged classes, but who choose to engage in what liberation theology calls the "preferential option for the poor," people like Archbishop Romero in El Salvador, who paid with his life for his option for the poor and his efforts to speak to the wealthy ruling class in his country, as well as to the president of the United States.

I see those who become advocates of a theology of a theology of letting go in a dominant nation as playing a different role from elites in impoverished socites who choose to serve the poor and to develope thelogies of liberation.（44）

These roles of critical mediation within the dominant societies

I will discuss the role of the Friends of Sabeel in the USA as a way of illustrating the practice and theology of letting go in relation to the oppression of the Palestinian people in the Occupied Territories of the state of Israel, buttressed by the support of the United States. Sabeel is a Palestinian liberation theology movement based in Jerusalem・・・(45)

15. the Friends of Sabeel: http://www.fosna.org/

Sabeel（Ecumenical Liberation Theology Center working for Justice, Peace and Reconciliation in Palestine - Israel）: http://www.sabeel.org/